

<書評>

法政大学イノベーション・マネジメント研究センター、洞口治夫編
『大学教育のイノベーター —法政大学創立者・薩埵正邦と
明治日本の産業社会』 書籍工房早山、2008年4月

長井純市

本書の副題は「法政大学創立者・薩埵正邦と明治日本の産業社会」である。

日本を代表する私立大学である慶應義塾大学には福澤諭吉、早稲田大学には大隈重信というカリスマ的な創立者がいる。しかし、法政大学にはそうした創立者はいない。編者である洞口氏自身が、「あとがき」において薩埵を「個人崇拜」（354頁）しないことを表明している。そして、本書は法政大学のイノベーター薩埵の「個人史に関する作品」（同上）ではない。

あえていうならば、大学教育のイノベーターとは、本書の編者洞口氏を始めとする法政大学イノベーション・マネジメント研究センターの研究者集団と読み取れなくもない。

そのような意味で、本書は、21世紀を迎えた法政大学のイノベーション（学内革新）に向けた血気盛んな研究者集団の宣言書と見ることができる（「あとがき」355-356頁参照）。

本書は、法政大学イノベーション・マネジメント研究センターが主催した「法政大学創立者・薩埵正邦生誕150周年記念連続講演会—明治日本の産業と社会—」という行事における全13回の講演録をもとに、その抄録をまとめたものである（353頁）。本書の副題は前述の通りであるが、重点は明治日本の産業と社会にあり、経済史・経営史・社会史に関する立体的な読み物をめざしている（354頁）。

したがって、本書は、今日における大学教育のイノベーションに関するノウハウを知ろうとする読者の期待には添えない。しかし、それは本書の欠点にはならない。なぜなら、本書に掲載された8人の興味深い講演録（内容としては学術論文）が読者を決して裏切らないと評者は確信するからである。

本書の構成を示そう。序章 教育のイノベーションを求めて（洞口治夫）／第1章 石田梅岩の研究にみる日本人の心（喜田勳）／第2章 教育者・学校経営者としての薩埵正邦（岡孝）／第3章 明治のお雇い外国人たちと産業発展の構図（尾高煌之助）／第4章 フランス語学習者から機械技術者へ（鈴木淳）／第5章 富岡製糸場の歴史と文化（今井幹夫）／第6章 明治期財閥形成者の起業家精神（宇田川勝）／第7章 生活水準の歴史的水準比較（斎藤修）／第8章 明治近代化の中の公的扶助と私的救済

(大杉由香)

この他に、楽しく読める次の4つのコラムが配されている。「フランスの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』から見た日仏近代」(朝比奈美知子)、「『近代化』へのまなざし」(半田昌之)、「漫画にみる明治の新風俗」(湯本豪一)、「薩埵家の墓所」(洞口治夫)。

以下、各章を要約して紹介しよう。

序章は、法政大学の草創期を、著者が小説家と見まがうような想像力の下に、薩埵と仏人法学者ボアソナードを中心として描き出し、且つ第1章から第8章を簡略にまとめ、紹介したものである。著者によれば、明治前半期の私立の「学校」は、現在の私立大学の原型となっており、「私立大学という制度のイノベーション」を「創り上げた人間」(イノベーター)の1人が薩埵であったということになる。なお、現在、4月10日は法政大学の創立記念日となっているが、そのわけを知りたい読者は、この序章から読むのが良い。

章が前後するが、第2章は、薩埵正邦の経歴を紹介したものである。前述の通り、薩埵は、今日、法政大学にとって、慶應義塾大学の福澤や早稲田大学の大隈とは異なって、カリスマ的な創立者としてあがめられている訳ではない。それは、福澤や大隈が生涯にわたってそれぞれの学校に関わっていたのとは異なり、薩埵が明治23(1890)年に和仏法律学校(法政大学の前身)を去ったからであろう(故郷の京都府にもどり、第三高等学校<のちの京都大学>の教師となった)。そして、同校を去ったのち、和仏法律学校に影響を残したり、及ぼしたりした形跡もないのである。

しかし、それでも薩埵は、今日の法政大学の理念となっている「進歩と自由」の原点を記した人物として記憶に止められるべき人物であるという。第2章は序章に続いて読まれると良いのではなかろうか。

第1章は、江戸時代後半期の思想家石田梅岩および石門心学について、その略歴、概要およびこれまでの研究における評価を紹介しつつ、梅岩が探求した「心」について分析したものである。ここで梅岩が登場するのは、薩埵が京都で石門心学を講じる学者の家に生まれたからである。そのような意味で、本章の副題は、「薩埵正邦の思想環境」と題されている。著者の「心」分析の結果は、たとえば『心』は『身の主=主体』であり、『事実・実在を知る=会得する力』である」以下、六項目にわたって記されている(45-46頁)。その結論の妥当性は読者に委ねたい。ここでは、梅岩と薩埵との関係について、「『法(無形学)』の研究・教育に生涯を捧げた[薩埵の、評者註]生き方」は『人の道=五倫五常の道』を究める石田梅岩の生き様に、重なり合う」として、著者があえて両者を同じ俎上に乗せた勇気を賞賛したい。なお、本章の註は石田梅岩に関する本格的な研究に進むことを望む読者にとって、たいへん便利なものであることを付言しておこう。

第3章は、「生産技術の面で[中略]現場の経験」(139頁)があり、「能力のある」(128頁)お雇い外国人が招かれ、日本における「工業化の初期条件」、すなわち「職工を初め、エンジニアとして育った人たちが、能力もあり、学ぶ意欲も生産意欲も非常に高かった」(128頁)ことにより、高い成果をあげたことを指摘したものである。なお、お雇い外国人の減少に関する要因分析として、緊縮財政ではなくて、それ以前から現場をコントロールしようとする日本政府の意向によることが実証的に示されていることは注目に値する。本書のテーマに関連づけて理解するならば、いうまでもなく、お雇い外国人は明治前半期の産業発展におけるイノベーターなのであるが、お雇い外国人による技術移転の

受け手としての日本人技術者たちもイノベーターの一員であることを論証したといえよう。この講演のあとの質疑応答において、鈴木淳氏が現場を知らない高学歴の技師の登場を、陸軍における参謀、官界における高等官（いずれも学歴主義）になぞらえて捉えているのは興味深い。また、これに関連して、19世紀後半のドイツで創設され始めた工科大学が輩出する技師という階層の日本への影響に言及した質問があり、講演における聴衆の水準の高さに驚かされる。

第4章は、小野正作という機械技術者の経歴を紹介したものである。この人物は、特に新しい機械を発明したわけではなく、欧米の機械を模造、修理する作業に従事し、明治初年以来大正初期に至るまで職場を転々とした。副題は、「小野正作の明治」である。フランス語に加えてさらに英語の学習を経て、機械技術に関する知識を習得して職を得るが、大学での高等教育を受けていないために、大学出の技術者に押されて職を転々とする結果になったという。しかし、そのために応用可能な経験範囲の広さを生んだのである。彼の波乱に富んだ経歴を通して、日本の工業化を支えた技術職人の一面が具体的に、且つ鮮やかに描き出されている。講演後の質疑応答でも、著者の近代日本の産業技術発展に関する豊かな学識が聴衆に提供されている。

第5章は、富岡製糸場の紹介と歴史的役割を論じたものである。富岡製糸場を知らない人はいないといってよいであろう。しかし、その技術指導者であったブリュナの年俸が、太政大臣の年俸9600円に迫る9000円という高額なものであったことを知る人はどれだけいるであろうか。また、施設を蔽っている埼玉県深谷産煉瓦の数が60万本を優に越えるというような挿話はどれほど知られているだろうか。さらに、本章には施設の写真がふんだんに配され、施設の規模を詳細に知ることができる。そうした紹介ののち、著者は、富岡製糸場の歴史的役割を過小評価する見方に対して、次のように反論する。すなわち、近代工業の先駆となっていること、富岡製糸場で学んだ工女がのちに技術普及において役立ったこと、他地域の器械製糸場設立に影響を与えたことなどである。そのような意味で富岡製糸場は確かに明治期の製糸業分野のイノベーターであったのである。本章は知っているつもり富岡製糸場について、もう一度学びなおす機会をあたえてくれる読み物である。なお、講演後の質疑応答で、猫が養蚕農家に飼われることが多い理由を知ることができるのは楽しい。

第6章は、明治期の財閥形成者として三井の三野村利左衛門と中上川彦次郎および三菱の岩崎弥太郎と弥之助の4人の活動を紹介したものである。著者によれば、財閥とは明治時代につくられたジャーナリズム用語であり、「出身地を同じくする経済人、財界人の協同的な活動を指す言葉」（234頁）であったという。しかし、今日では「特定の家族・同族の封鎖的所有・支配下に成立した大企業を中心とする多角的事業経営体」（235頁）と定義されているという。財閥研究は、ややもするとこれに批判的なイデオロギーをとるものがあるが、本章にはそれがない。著者は、財閥形成者の4人の活躍と挫折を起業家精神の観点から具体的に論じている。文字通り、企業経営におけるイノベーターの事例研究といえよう。

第7章は、13世紀以降20世紀に至る期間の南イングランドにおける建築職人の実質賃金の推計研究の成果や、15世紀から17世紀に至る期間のウィーン、アウグスブルクなどの地域の同様の研究成果を利用しつつ、さらに「消費バスケット」という考え方に基

いて 18 世紀から 20 世紀に至る期間の西欧都市と中国（北京）、日本（畿内農村、都市京都・東京）との生活水準比較を試みた壮大な研究成果である。この種の計算手法に不慣れた評者にはいささか手強い研究成果ではあったが、たとえば「徳川時代の農民の生活水準は多分イギリスの普通の労働者の生活と余り変わらなかった」（284 頁）という著者の結論に興味深く受けとめることができた。また、講演後の質疑応答における体格に関する挿話もきわめて興味深い。その質疑応答の冒頭で、編者の洞口氏がこの研究のように「百年、千年というロングターム」で研究することの意義を紹介しているが、その長さの歴史的資料を有する地域の中に日本が含まれており、日本がこのような国際的な比較研究の対象となり得ることに改めて思いが至った。この場合、著者の斎藤修氏自身が、洞口氏のいう「教養」のイノベーターということになるうか。

第 8 章は、戦前における公的扶助の法制、すなわち恤救規則（のち救護法）を中心に、下士兵卒家族令（のち軍事救護法、軍事扶助法）、備荒貯蓄法（のち罹災救助基金法）、伝染病予防法（のち感染症予防法）、北海道旧土人保護法（のちアイヌ文化振興法）、行旅病人及死亡人取扱法、精神病者監護法（のち精神保健および精神障害者福祉に関する法律）などについて紹介しつつ社会福祉史の研究成果に言及し、さらに地域における公的・私的扶助のあり方を論じたものである。とりわけ著者は法学者ボアソナードが寄金した秋田県の私的扶助組織である感恩講（江戸時代文政年間に創設）に着目した。この感恩講の慈善・救貧活動を他地域のケースと比較検討するとともに、現在のソーシャル・ケースワーカーや NPO に重ねて考えてみる見方が興味深い。この感恩講に関連して遠藤幸雄（東京、メキシコ両オリンピックの体操競技金メダリスト）の名が登場したのは驚きであった。また、三代住めば江戸っ子といわれるゆえんについて、都市の流動性から説明できることも興味深い挿話である。江戸時代に生まれた感恩講が現代の社会福祉や NPO のイノベーション・モデルになり得るか、読者の判断はいかがであろうか。

本書は、全 357 頁、上下二段組みの肉厚な図書である。しかし、文体には講演としての語り口を残しており、実に読みやすい。また、付図やグラフ、写真などが内容理解に大いに役立っている。講演の際に聴衆に配布された資料が再録されていることも、ありがたいことである。さらに、どの章からでも読み始めることができる。

講演後に講演者と聴衆との間で交わされた質疑応答が再録されているが、質問者の学識の深さと相俟って、講演をさらに発展させた議論や歴史像を学ぶこともできる。

各章の註も充実しており、学術的な関心をもって、さらに掘り下げた研究を志す読者の要請にも十分に答える読み物となっている。

21 世紀を迎えた法政大学が、単に入学試験受験者数の多さを誇るだけでなく、いかに学内革新（イノベーション）に努めているかを知ってもらうためにも、一読を薦めたい図書である。過去を振り返れば未来が見える。（2008 年 4 月刊、A5 版、357 頁、定価 2500 円、書籍工房早山）

長井純市（ながい・じゅんいち）
法政大学文学部史学科准教授